

The Whisper from Amherst

～エミリオのささやき～

エミリオの得意技の1つはなぞかけです。エミリオの作品には多数の「謎々詩」(riddle poems)が存在します。

さて、この詩はいったい何を詠んだ詩でしょうか。

イトウ シフツ フウロム リーデン シーヴズ 'It sifts from Leaden Sieves'

It sifts from Leaden Sieves -

天の 鉛の篩で ふるわれて

イトウ パワーズ オール ザ ウッドゥ
It powders all the Wood.

それは こまかに 森の上にかかれる。

イトウ フィルズ ウィズ アラバスター ウール
It fills with Alabaster Wool

道のでこぼこを、それは

ザ ウリンコース オヴ ザ ウロウドゥ
The Wrinkles of the Road -

白いウールで 埋める。

イトウ メイクス アン イーヴン フェイス
It makes an even Face

山々の顔つきも、野原の顔つきも、

オヴ マウントウン アンドゥ オヴ プレイン
Of Mountain, and of Plain -

それは のっぺらぼうにする。

アンブロウクン フォーヘーッドゥ フロム ディ イーストゥ
Unbroken Forehead from the East

それは、東から ずうーっと 行って

アントゥ ディ イーストゥ アゲイン
Unto the East again -

また 東まで、ひとつのひたいにする。

イトウ ウリーチイズ トゥ ザ フェンス
It reaches to the Fence -

それは、まきばの柵の高さに達して、

イトウ ウラップス イトウ ウレイル バイ ウレイル
It wraps it Rail by Rail

柵の一本、一本をおおい、ついに、

ティル イトウ イズ ロストウ イン フリースイズ
Till it is lost in Fleeces -

一枚のひつじの毛皮かと、思わせる。

イトウ デールズ セレスティアル ヴェイル
It deals Celestial Vail

それは、天のペールを 配ってまわる。

トゥ スタンプ アンドゥ スタック アンドゥ ステム
To Stump, and Stack - and Stem -

切り株に わら束に そして草の茎に、

ア サ マ - ズ エンプティ ウルム
A Summer's empty Room -

夏が去った後のからっぽの部屋に、

エイカーズ オヴ ジョイントゥ ウェア - ハーヴェストゥ ワ -
Acres of Joints, where Harvests were,

以前は収穫のあった山あいの田畑

ウリコードウレス バトウ フォー ゼ ム
Recordless, but for them -

だが 収穫がなければ記録にも残らない場所

イトウ ウラップオーズ ウリス ツ オヴ ポウスツ
It Ruffles Wrists of Posts

棒くいの手首に ふわふわを巻く、まるで

アズ アンコーズ オヴ ア キーン
As Ankles of a Queen -

女王のくるぶしに 巻くように。それから、

ゼ ン スティルズ イ ツ アーティザンズ ライク ゴウ ス ツ
Then stills it's Artisans - like Ghosts -

雪の職人たちは動きを止めて、

幽霊のように

ディナイング ゼ イ ハ ヴ ビーン
Denying they have been -

ひそつとなる、彼らはいなかった、と思わせるのだった。

(訳：内藤 里永子「まぶしい庭へ」より)

感のいい人は、第1節で予想がつかますね。わたしが1つ気になったことは、日本語で日中なのに今にも泣き出しそうな暗い空を「鉛色の空」と表現しますが、英語でも同じような色に例えるかどうかということです。そこで、辞書(大修館書店:ジーニアス英和辞典)でleadを調べたところ、さすがに昔から用途の広い金属らしく、本来の意味のほかにも様々な慣用句に使われていました。例えば、My legs feel like lead.(=足が棒になる=足が疲れて重い)、Get the lead out.(=急げ、すぐとりかかれ)など、重さ・頑固さ・無知などの象徴とあり、欧米人も日本人とよく似た感覚に鉛を用いることがわかりました。

第2節では、山肌や枯れ草でおおわれた平原をface(顔)に例え、目鼻を隠して額を含めてなめらかにするものです。もうおわかりでしょう。念のため、第3節を読んでいきます。

第3節では、その「あるもの」は垣根の1本、1本に降り注ぎ、その白さと言ったら羊の毛皮か天のベールのようです。この節に関しては、推敲の跡があり、ガラスのベールと書かれている詩もあります。いずれにしても透明性のある白い布でおおわれる様子を表現したかったのですね。

第4節では、垣根だけではなく、さらにありとあらゆるものの上にヴェールが広げられて夏の出来事が跡かたもなく消し去られます。

そして最後に種明かしをしますが、そこにもエミリイの一工夫が見られます。今まで述べた数々の自然現象は、雪を「職人」に見立てる擬人法で、職人は仕事を終わるとこっそりといなくなり、あとは真っ白な雪景色が広がっているという見事な結末です。

Nellie's Mom



アームウォーマー



地元の画家によるアマーストの冬景色



レッグウォーマー